

分娩管理を見直そう

1 分娩する環境を整えよう
牛は放牧地で分娩するときは、群れを離れて足場の柔らかいところに移動しますが、牛舎での分娩では、人が安楽な環境を用意する必要があります。

(1) フリーストールの場合
可能なら分娩房を用意し、自由に体勢を変えやすく、落ち着いて分娩できるようにしましょう。

① 多量の敷料を用意する。蹄が少し埋まるくらいが良い（写真1）

② 介助のためのスペースを確保する

③ 牛群からの隔離は採食量の低下を招くこともあるので、分娩房への移動は分娩の兆候が現れてからとする

(2) 繋ぎ牛舎の場合

繋いだ状態での分娩となる場合でも、少しでも環境が良くなるよう工夫しましょう。

① 寝起きがしやすいようにクッション性のある牛床マットを敷くか、多量の敷料を入れる

(写真2)



写真2 牛床マット



写真1 安楽性の高い足下

② 子牛が尿溝に落ちないように、スノコを用意する
③ 初産であれば、繋ぎと分娩のストレスが重ならないように、分娩2ヶ月前から繋いで飼う

2 牛の大きさを管理しよう
分娩時に母牛が小さく、それに対して胎児が大きいと難産の原因になります。
初産の牛の体格を大きくするには、配合飼料給与量を増やします。

給与量を増やすことで増体に加えて初産次の乳量増加の効果がありますが、経産高泌乳牛と同様に、BCSの低下等への配慮が必要となります。

参考
育成妊娠期に配合飼料2.5kg給与と給与なしを比較した結果、日増体量0.3kg増加（新得畜産試験場、1994）

また子牛（胎児）が大きくなりすぎないように、分娩予定日を過ぎたら分娩誘起等の処置をとることが考えられます。

3 分娩介助の基準を見直そう
分娩時には、介助が必要な場面もありますが、不必要な介助をするると逆に難産を助長することもあります。

分娩介助基準（図1）に基づいて、介助が必要かどうかの判断をしましょう。

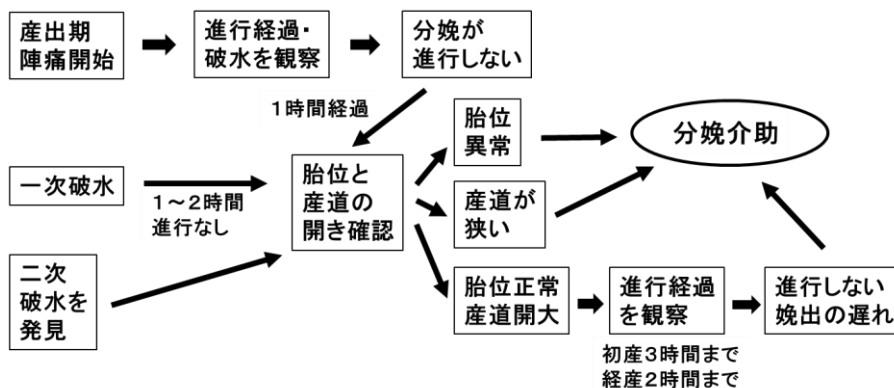


図1 分娩介助基準（根釧農業試験場、2008）

不必要な介助による悪影響
① 産道に傷がつき、感染症、胎盤停滞、繁殖障害につながる
② 子牛の首が曲がってしまい、難産を引き起こす（胎子失位）